

‘91.8月

井深対談

ち = 乳 = 血 = 霊

ゲスト 草柳 大蔵（くさやなぎ・だいぞう）

1924年神奈川県生まれ。東京大学法学部卒業。雑誌編集者、新聞記者を経て1957年からフリー。1984年、第35回NHK放送文化賞受賞。評論、ルポルタージュ、芸術論、人生論など、その活動分野は多彩。著書に『企業王国論』『内務省対占領軍』『花で語る人生論』『トマトの巨木の生命思想（共著）』他多数がある。

草柳 最近、とっても心にひっかかっていて、その理由を知りたいと思っていることがあります。それは昨年、総理府が世界の母親の意識調査というものをいたしました。その時に「子育てに生きがいを感じますか」という質問に対して、「はい」と答えた母親が、フランスが最高で78%です。ドイツが68%。アメリカは59%。日本の母親は20.6%、先進国の中で最低なんですね。

つまり、5人に1人しか子育てに生きがいを感じていないということですね。どうしてこうなったんだろうか。それが心にひっかかって、いろいろな理由を考えてみるんですが、なかなか…。

例えば、今、生活自体がプッシュボタン・カルチャーで、何でもボタンを押せば家事のパフォーマンスはできてしまう。母親自身が第1期の人格形成を遂げる時 - つまり6歳から14歳ぐらいまでの間 - プッシュボタン・カルチャーの中で育ち、そうやってそれまで自分の思うようになる生活が流れてきた。ところが、育児だけは思うようにならない。そこで、違和感というか、面倒くさいというか、そういう気持ちが出るんじゃないか。

しかし、そうだとしたら、アメリカもドイツもフランスも同じ条件じゃないかということになる。だから、このプッシュボタン・カルチャー論は根拠薄弱ということになります。そうやって、幾つか理由を立てて消去法で消していくと、理由がどうしても見つからないんですよ。井深さん、どうお考えになりますか。

井深 私流に言いますと、これは非常に簡単なことで、0歳教育というものを忘れているんだと。育児という言葉がそもそも悪いんですね。肉体を育てる面というか、おっぱいをやるとか、おしめをどうするか、離乳食をどうするか、育児というと頭がそういうことにしかいかない。それなら誰がやってもいい、もっと親切なナースがそれをやりゃあむしろ、そのほうがいいじゃないかというふうになる。母親が何をすべきか、あるいは何をしなきゃならないかということが、世界を通じて忘れられているんですよ。

しかも、その1番重要な時期というのが非常に早くて短い。生まれた直後か、あるいは生まれる前からのお母さんの配慮というものが、その人の人格をこしらえるのに大変大きな影響力があるということ、誰も言わない。第一、欧米の考え方では、胎児とか新生児とかに心というものは存在しない、無意識の存在であるというのが通論なんです。

一方、東洋では、胎児は宿った時から心というものを持っているとしている。妊娠時期を5つぐらいに分けて、第1期はどういうことに気をつけなきゃならない、第2期はどうなる、第3期はどういうことが起きると、非常に明確に仏典にも出ているんです。しかし、これは仏教の人でもあまり知らないんですよ。

そういうふうに胎児の人格というものを認めているがために、生まれた時は0歳じゃない、1歳、それが数え年の意味なんですよ。

だからこそ、母親でなければできないことがある。お母さんが子供の人柄の初めをこしらえる - そのもとは主として愛情だと思うんですけども、お母さんはそれをやらなきゃならない人なんですよ、おっぱいをあげながら。動物でも、おっぱいをあげる期間という

のは短いんですよね。しかし、その期間というのが、お母さんの気持ちや習慣、そういういろいろなものをトランスファーする大変重要な期間なんですね。

だから動物園でも、お母さんからおっぱいをもらったのと、そうでないのとでは、親子関係が全然違うわけなんです。そこら辺の基本の育児という問題の解釈が全然間違っていると、私は考えているんです。

それで、この0歳教育というのは-0歳教育という言葉を使うのはちょっと嫌なんですけれども-そこに重要性を認めなきゃいけないし、それをほんとうにやったら、人類のあり方は違ったものになってくるだろうと。どんな性格でも、お母さんがそのつもりになってしようと思ったら、おそらく3ヵ月か4ヵ月ででき上がってしまうだろうと、私は考えているんですがね。

草柳 育児という言葉がフィジカルな面でしか強調されていない、メンタルな面が忘れられてしまったという指摘は、そう言われてみるとなるほどそうですね。

日本には「大和心」とか「大和魂」という言葉がありますが、我々の世代は「大和魂」というとすぐ吉田松陰を思い出して、「身はたとえ武蔵の野辺に朽ちぬとも、とどめおかまし大和魂」。そして「大和心」というと本居宣長ですね、「朝日におう山桜花」になるわけですね。

だから、我々は、小学校から中学の教育を通じて、大和心、大和魂というのは男の言葉かと思っていたんです。ところが、大和魂というのは、紫式部が最初に書いているんです、女言葉なんですね。それから、大和心というのは赤染衛門なんですね。「やすらはでねまじものをさよ更けて、かたぶくまでの月を見しかな」。赤染衛門が赤ちゃんを産んで、おっぱいが出ない。どうも1週間ぐらいでとまっちゃったらしい。それで、身分があったからすぐ乳母さんを雇うんですね。ところが、その乳母さんがまた1週間ぐらいでおっぱいが出なくなっちゃって、周囲の人が大騒ぎするんですね、どうしよう。すると、赤染衛門が、「何を騒ぐんですか。この子には、私のお乳は移すことはできなくても、大和心を移してやればいいじゃないですか」と言うんです。その時初めて大和心という言葉を使ったんです。

私が、すごいなと思ったのは、昔は乳というのは「ち」と読んでいたんですね。「ち」は同時にブラッドの「血」なんですね。同時に血の中に霊がこもっている。「霊」と書いて「ち」と読むんです。上に「水」をつけると「みずち」と読んで、川とか池とか滝とか、流れているものの中に霊があるという、そういうつかみ方を日本人はしてきたんです。

井深 一種の「気」ですね。

草柳 だから、「ち」を与えればいいんだというのは、ブラッド、魂を与えればいいんだということ。

型・形の違い

草柳 日本の文化は、どうもそこから出てきているんじゃないかと思うのは、型と形が違うことですね。

子供には6歳の6月6日からお茶を習わせるとか剣道を始めさせるとか、よく言いますね。私なんかは剣道だったんですが、最初は、お師匠さんの型を覚えろと言って型通りやらせられる。そのうち、どうしてこの型をこの順序でやらなきゃいけないのか、と自得するものがあるんですね、納得するものが。その時初めて、その人間の「ち」が入るんですね。それで、型が形になるんです。

だから、型はいいけど形になっていないという、そういう言い方を日本人はしてきた。

井深 それは、私はいい話を知っているんです。ヴァイオリンの早期教育で有名な鈴木チルドレンのことですが、まず、上手な人は、優等生的な弾き方になるわけなんです。これは先生のテープを聴くとか、だれそのレコードを聴くとかして、そして、あるところまでいくんです。

不思議なことに、女の子は12才ぐらい、男の子は8、9歳ぐらいになると、ある日突然、弾き方が変わってくる。私、それを指摘したことがあるんです。前の年、えらい四角張った、おもしろくない演奏だけど、完全無欠なんですよ。それが急に曲を歌い出したんです。これはおもしろい。私、そう感じたもんだから、「あの子、どうしてあんなった？」と言ったら、鈴木先生に「あなた、それが分かったのか」と言われて、大変面目を施したんですが…。

草柳 大したお耳ですな。

井深 いやいや、だって全然違うんですもん。去年は型通り、今年は自分の音で歌っているんですよ。それで、自分で曲を歌い出すためには土台を、非常にながちりした楷書でまず身につけなきゃ、ほんとうの歌い方はできないんだなということもよく分かりましたね。

草柳 ベルギーで長いこと勉強していた宮沢明子さんが、お書きになっていました。井深さんがおっしゃっているのと同じなんですけど、日本からピアノなりヴァイオリンなどを学びに来た子がコンクールに出る。チャイコフスキーコンクールをはじめ、ヨーロッパにはいろいろなコンクールがある。大体、1等、2等、3等は日本がとってしまうけれども、新聞の批評は毎年必ず一致しているというんですね。「正確だけれど美しくない」と。どうしたら美しくなるか…、さっきおっしゃった、うたいが、自分の歌にならない。

もう一つびっくりしたのは、宮沢明子さんはルビンシュタインに教わるんですね。それで、ルビンシュタインが1番最後に教えたことは何かというと、「音のしない時が1番難しいんだよ」と。つまり、ポーズの時ですね。「音のしない時をどう伝えるか、どう聴かせるか、それができたらピアニストだよ」と言われたという。すごいなと背筋が寒くなりましたけどね。

だから、先ほど言われたように、自分の音にしてしまうというところが、やっぱり「ち」

が入るといところなんでしょうね。

井深 それが、不思議に男の子のほうが早い。女の子は早く大成するんですけど、そういうものが湧き出してくるのは…やっぱり男の子のほうが山っ気があるんですかね。

草柳 ロマンチストなんじゃないですか。女の子はわりあいリアリストだから…。

井深 学校の成績がそれを現していますよね。

草柳 はっきり出ていますよね。悔しがって言うわけじゃないけど、この頃、大学の卒業式というと、卒業生総代って大概女性なんですわね。

井深 この間、早稲田大学の西原前総長から聞いた話では、8学部のうち6学部の代表が女の子。今年は文学部の代表が男だったら、「えーっ」と言って、思わず拍手と歓声が上がったそうです。

草柳 そうですか。チャイコフスキーコンクールで一昨年だったと思いますが、ベトナム出身の男性のピアニストが9位になりました。とっても素晴らしい演奏をしたんだけど、3ヵ所ぐらいキーを間違えたんですわね。その子はモーツァルトを弾いたんです。その子の談話が新聞に載っていて、「僕はモーツァルトを愛し過ぎたために間違えた」と、それが見出しになるんです。その子は今、ヨーロッパでナンバーワンのピアニストです。解釈の自由さ、深さというものがあるんですわね。

そういうことは、体だけを考えた育児体系の中からは出てこない。

井深 そうなんですわよ。医学とフィジカルと…。

草柳 栄養学と。

井深 最初は愛情そのものでいいから入れてほしい。そして、それは1年間で終わりにしてもいいから。

で、父親は何をするかといったら、父親は尊敬される存在にならなきゃならない。お母さんも自分のだんなさんを尊敬する存在とすべきです。おしめをかえたり、料理を手伝ったりすることがお父さんの役割じゃなしに。人間というのは誰でも、尊敬する対象を持っているということは大変幸福なことであるし、現実にも役に立つことだと思うので、それをお父さんの役割にしなきゃいかんと私はこの頃言い出しているんです。

草柳 賛成ですね。環境の中の1つに家風というのがありますわね。尊敬されるためには、やっぱりその家自身が環境の1つである家風をつくって、父親はその家風の守護神であり、原理であり、原則であると。その原則がネクタイしめて座っているという(笑い) そういう父親じゃないと困るわけですよわね。

井深 それは野生動物も同じです。ライオンなら、ライオンの雄がやっぱり帝王として一家の存在の役割を果たさなきゃいけないんじゃないか。私が、もうちょっと野生動物に習うべきだということを言ったら、東大の哲学の先生が大変いいことを聞いたって言ってくれましたけれどもね。やはり父親は威厳のあるオーソリティーの存在であらねばならないと思うんです。

草柳 確かにそれが今、社会に欠けているということが指摘されておりますわね。近頃、私が感心

したのは、登校拒否の問題を非常に深く、鋭く勉強している明星大学の高橋史朗という先生がいます。

その高橋さんが、どうして明石家さんまとかタモリとかビートたけしに若い人たちがあこがれるか、なぜ彼らが出る番組の視聴率が高いかということについてお書きになっているんです。なるほどなと思ったのは、彼らは建前を言わない。人間だから、男は女を抱きたいだろう、女はおしゃれがしたいだろう、大人をうまいことちょろまかして、あまり努力しないでいい生活がしたいだろう、そういう人間として非常に低位の本音ばかりを言っているからだ。

井深 低位の本音ですか（笑い）。

草柳 だから、建前を1秒も言わないで、低位の本音だけ並べるから、若者はつくんだと。つまり、建前喪失だと言うんですね。

井深 それと評論ですね。

草柳 そしてプロセス。つまり、インスタントのものをたくさん売っているから、お母さんが、それを買ってきて炊事の時間を短くするというのは分かるんだけど、例えばインスタントのお味噌を買ってきても、もう1つの味噌を加えて2つの味噌をまぜ合わせ、ちょっと当たり鉢で当たって、そしておつゆに溶かして……。そこにクリエイションがあり、プロセスがある。家庭の中にそういうプロセスがあると、子供は、やっぱり物ができるにはプロセスが必要なんだなと分かる。

ところが、今、そのプロセスを全部すっ飛ばして結果だけを得るために……。プロセスがないということはどういうことかということ、アマチュアで通用してしまう。だから、今のテレビのタレントさんというのは全部アマチュアリズムなんですね。

井深 なるほどね、専門家は要らないというわけだ。

草柳 そしたら、自分もなれるという、すごい親近感がわくんだ、とこういうことを言っていました。

花・長・風・月が選ぶ基準

草柳 よくよく考えてみると、これはTV局のどこが悪いとかいう問題じゃなくて、家庭の中で建前を喪失してプロセスを喪失した。建前とプロセスがないということは家風がないということですね。そこに大きな問題がありそうですね。

井深 家風という言葉が出たけれど、それは私、大変重要だと思う。

遺伝というものは、私は極力否定して、なしと考えて差し支えないと。しかし、家風というものは別であって、やはり先祖から伝わったいいところ、悪いところもあるかもしれないけれども、何かそこに年月をかけて認められた尊んでいいものが存在しているということは、非常に重要なことだと思うんですね。

私は孫たちに、井深家の先祖の系図を - 新田義貞くらいまでいくんですけど、話してて、

こんなことおもしろくないかと思ったら、「先祖はこうなのか」と言って、そういうものを尊ぶ習慣がついたようです。私の先祖をずっと探っている人がいますね。その人がお墓を探し当てたりなんかするのについて行って、大変興味を持っている。やはり家風であるとか、家というものを本気で考えるのは意味がある。

日本の国だって、こんな立派ないい国なわけですよ。それを尊んで大切にすること、しちやいかんことのような教育ばかりされているのでね…。

草柳 おもしろいと思ったのは、若い人が会社を選ぶ基準として花長風月を選ぶというんですね。「花(か)」は花形産業。「長(ちょう)」は長期休暇。「月(げつ)」は月給の高いところ。「風(ふう)」は社風のあるところというんですね。

井深 それはおもしろいですね。一風変わったというあれですね。

草柳 そうでしょうね。パーソナリティーがあるというか、個性があるというかね。

それを選ぶというのは - 「風」というのは、全体がつくるものでしょう。その全体がつくるものの中に日本の若い者がなじみたいというのはおもしろいですね。人間は個体では生きられない。どんな単体細胞でも、細胞の動きを見ていると自己組織化というのを必ずする。親につっぱる子供でも、暴走族になると何々組というのに入るんですね。だから、自己組織化の対象がその社風だというのは非常におもしろいと思うんです。「個」と「風」の問題です。

今、社会に出ると若い人たちに目立つのが、例えばおじいちゃん、おばあちゃんが電車の中でよろけながら立っていても、自分は座っていて席を譲ろうとしないとか、あるいは階段を年寄りが重い荷物を持って上がっていても、後ろから持ってあげようかと声をかけないとか。日本の若者は、ほんとうに思いやりというのがないんですね。

その片一方では、「個」と「風」の問題があるんだから - 全体の中でしか生きられない。あるいは生きているというよりも生かされていることのほうが多いんだという、そういう意識はあるんだろうと思う。ただ、それが社会行動になって出てこないところに問題があるんですね。

井深 この間、おもしろい話を聞きました。もう70近い人ですけども、赤ちゃんを抱いたお母さんがいたので、席を譲ってあげた。ありがとうも言ったか言わないか…。で、その隣があいたんだそうです。そしたらその人に「どうぞ」と言わずに、「あんた、あんた」って、だんなさんと呼んで、だんなさんがガチャッとそこに座っちゃった(笑い)。

まだあるんですよ。その次に、逆側があいたら、赤ちゃんを座らせた。それで、その人はあんまりだと思って、ちょっと注意したんですけど。そしたら「あんた、そんなに座りたかったら、初めから譲らなければいいでしょう」って、だんなさんが答えたというんです。そういう人もいますよね。

そうかと思えば、代々木のオリンピック記念センターで会合がありまして、私、歩けなくて、車椅子で3階から1階へ降りようと思ってエレベーターの前にいたんですよ。そしたら、エレベーターはいっぱい、どこかの会社の入社式か何かで…。これじゃしょうが

ないな、一体どうしたらいいだろうと思っていたら、1人が何かちょっとよって、ざーっとみんな降りてくれたんですよ。そういう例もあるんです。私は感激しちゃいましたね。

草柳 だから、みんながすっかり個人主義になって、自分さえよければいいという世の中になった、というものでないんですね。

井深 いやいや、特に若い人は、例えばボランティアの考え方を相当持っていると思うんですけども、うまい機会を大人どもがこしらえてあげない、それが多いいんですね。ただでも日本人というのにはにかみ屋ですから、そういう気持ちを持っていても勇気がなくてなかなかやれない。そういう機会を努めてこさえてあげるようにしたら、日本も随分変わるんじゃないかと。そういう心配りなんていうのは、私はお母さんから0歳の時に受け継がれるものだろうと思うんですけどね。

草柳 そうですね。そこは非常に大きな問題なんですね。

曾野綾子さんが身障者と一緒に、キリストが歩いた後をずっと歩く旅を、毎年やっていらっしゃるんです。ボランティアたちも手伝いに行く。

とにかく出エジプト記からやるわけですから、聖書どおりに、ナザレを通過して、イスラエルまで行く。その間中、キリストが訪ねたいろんな古い教会、それも観光的なものじゃなくて、ほんとうに祠みたいな教会とか古いお城とか、そのたびに車椅子ごと担いでバスから降ろさなきゃいけない。見終わったら、また車椅子ごとバスへ乗せなきゃいけない。ものすごい力仕事なんですね。

そして、中には自分はこの肉は食べられないとか、生野菜が食べたいとか、いろんなことを言う人もいます。それを全部交渉してやるのがボランティアの青年たち。

その手伝いの若者たちの中に、4、5人、誰が見てもほんとうに驚くほどよく働いて、1日3時間か4時間ぐらいしか寝ないでやっているのがいる。これがみんな暴走族出身。暴走族を経験してきた男ぐらい頼もしいものはない、という話をしておられましたけどね。

父親、母親のつくっている家庭、そこには多かれ少なかれ一流大学に入って、そして一流会社、例えばソニーに入っているというのがあるわけですよ。そういう父親、母親のシュッド・ビーという、何々であらねばならんという価値観がある。そうすると、子供が持っている夢とか可能性というものが、気骨のある子ほど、父親、母親がつくった枠組みに反発するわけですね。で、暴走族になった。それを通過すると今度は人間としてもものすごく頼もしい人間になるというんですね。

これはやっぱり大きな問題だなと思います。

漢字の深さはファジー

井深 また、0歳にいきますけれども、暴走族というのは、相当な感性を持っていないと、命にかかりますから、ぼんやりしてちゃやれっこない。そういう感性が6歳以下の時に養わ

れているんですよね。私は非常に単純にそういう割り切り方をするんですけどね。

草柳 つまり、0歳から6歳の間に感性が非常に育てられている？

井深 ええ。言葉が始まっちゃ遅過ぎるんですよ。我々が学ばなきゃならないことには、言葉以前に教えられなきゃならないことがたくさんある。しかもその能力が、6歳でほぼ終わりになっちゃうんですよ。

草柳 それなら6歳までにお母さんから受けたメッセージはおそらくとってもよかったんでしょうね。それで、大変感性のいい人間になった。ところが、さあ小学校へ入った、中学校へ入ったということになると、今度は進学戦争の中のお母さんでしかなくなってしまふ。よけい反発するんじゃないかな。

井深 お母さんは、初めから感性よりも左脳のな、英語ができるようになる、数学ができるようになるという合理性、知識性の育て方しかないほうが多いわけです。

だから、言葉が言えるか言えないうちから、1たす2は3であるとかということばかりやるでしょう。だけど、それとは別の意味で、言葉の始まる前に漢字は覚えられるんですよ。パターンなんですよ。

草柳 パターン認識なんだ。

井深 漢字のまる暗記は幾らでも入るんです。ああこういう意味があったのかと分かるのは、20年後かもしれないけど……。漢詩というのは、3歳児、2歳児でも、いい音声で朗々とやると、子供は生理的にものすごく好きなんですよ。

草柳 ああそうですか。

井深 漢詩の意味なんていうのは絶対に教えないで、大人になった時に、ああこういう意味を持っていたのかと分かればいい。

草柳 型と形ですね。

井深 型を覚る。その意味で、理屈なんて何も言わずに、二次方程式であろうが、積分であろうが、微分であろうが、まる暗記。文句なしにまる暗記するという、その能力は非常にあるんです。それをまず身につけておいて - 言葉以前にそういうものが身につくわけなんです。言葉を使って説明できるものは6歳以後で十分追いつけるんですよ。

草柳 なるほど、よく分かります。

井深 語学なんて、まさにまる暗記です。私はよく弁護士さんに質問するんですけども、「六法全書のどこに何が書いてあるというのを完全に覚えて、弁護士の役割をどのぐらい果たせる？」と言うと、これはおもしろいんですよね、「半分は果たせる」と言う人もいるし、「3分の2はそれで果たせる」と言う人もいる。そうすると、実現してはいませんが、6歳以前の子供が六法全書を暗唱するのはそう難しいことじゃないんですよ。

中国なんかでも、漢字の読むだけのコンテスト、2万字、3万字なんていうのは楽なんですよ。大人のメモリーというのは、全部キーワードを必要とするわけですよ。キーワードなしでやる子供のまる暗記と大人のそれをはっきりさせて、まる暗記のやれるものは早くにうんとやっておくべきなんです。我々も教育勅語なんていうのをまる暗記したり、書

かせられたりしましたけども、ああいうことが非常に必要なんですね。

日本のしっかりした人、例えば戦前にノーベル賞をもらってしかるべき人も10人ぐらいいた。その人の経歴を見ると、ほとんど子供の時に四書五経から始まっている。湯川先生がその最たるもので、4歳から『大学』に始まって、『論語』…ずっと四書五経で、片仮名と平仮名をすっ飛ばしていきなり入ったんですね。晩ご飯が済んで7時頃から、おじいさんに「子曰ク」とやられるので、もう眠いのにと嫌々やっているうちに、漢字に興味を覚えちゃって、今度は自分で読み出しちゃった。

湯川先生の自伝を読むと、老子と荘子は、抽象的だということで、おじいさんがこんなもの子供に分かるわけないと、本箱のあちのほうへ置いてあった。それで、それを見たら、老子がものすごくおもしろい。物語の『ノンちゃん雲に乗る』という、あれたなおもしろさだったと言うんですね、湯川先生にとっては。

自分で書いておられるんだけど、湯川先生の思想体系というのは、どうも10歳以下で触れた老子と荘子によって考え方の骨ができたような気がする。それに気づいたのは、旧制の高等学校の3年になってから、ちょうど量子力学が始まって、丸善で薄い量子力学の手引きみたいなものを見たらものすごくおもしろい。それで、その量子力学にだーっとのめり込んだ。

それまで、クラスメートには、自分より頭のいいやつがいっぱいいると思ってたんだけど、量子力学でがーんとデッドロックなんですね。それで、どうして私にはおもしろいのに、彼らはおもしろくないんだろうという疑問が起きた。その時に、自分の考え方はどうも老子、荘子によってでき上がっているなということに気づいた。湯川先生の自叙伝を読むと、それが非常にありありと書かれているんですね。

他にも、いろんな事情でノーベル賞をもらえなかった人、北里さんをはじめ、いっぱいいるんですが、その人たちが例外なく子供の時に論語をやっているんです。どうもそういう型から暗唱して、非常に大きなボキャブラリーを持つ。まる暗記の中から応用問題が幾らでも出てくるわけなんですよ。

草柳 湯川さんがノーベル賞を受賞されて、30周年記念というのを京都のホテルでおやりになった。その時に世界中の物理学者を集めて、それで引出物を出したんですね。その引出物はたしか西陣織のテーブルセンター - そこに荘子の言葉を並べ、そして紋章も…。量子力学でノーベル賞をとった時に国王からサーという称号をもらうんですね。サーになると紋章がないといけない。その紋章が二つ巴…。

二つ巴というのは、中国の思想で、陰陽の竜が2匹でお互いに尻尾を飲もうとして回っている姿。これが量子力学の出発点だったんですね。

井深 ニュートン以後の物理学者というのは、大なり小なり古い中国の哲学が大切だということをはきまえていますね。

草柳 長岡半太郎さん、仁科芳雄さんがやっぱり四書五経ですね。

日本の物理学の基礎を築いた人、日本の近代化の幕開けをした人、みんなそうですね、

四書五経から…。

井深 漢字のボキャブラリーを入れておくということは、大変な財産なんですね。

草柳 何でしょうね、それは。

井深 フレキシビリティが非常にあるんですよ。だから、老子がいいのかどうか知らんけど、漢字というものは、意味があるようでないようで、考えようによってはどういう飛躍でもその中から導き出せるのでね…。

草柳 ファジーなんだ。

井深 哲学のない日本人には非常に便利な存在なんじゃないかしらんと思うんですがね。

草柳 確かにね。そこから日本人のファジーな性情というのが出ているかもしれませんね。

井深 それからもう1つは、ユダヤ人の教育の仕方ね。ユダヤ人がノーベル賞の中の34%を、もっているんです。あれはユダヤのティピカルな家庭だと、お母さんが生まれた時から、トーラとかタルムードとか、そういうお経とか祈禱文とかを赤ちゃんのところで大きな声で唱えるんです。だから唱え事をする、暗唱するということが非常に慣れていて、それで、自分もだんだん暗唱するようになる。

草柳 ああそうか。暗唱というのは、頭の中に非常に確実な、あるいはベーシックな情報回路をつくるということですか。

井深 そうなんです。まず入れておくわけ、エレメントをたくさん…。

草柳 あとは、そのエレメントの組み合わせになるわけだ。

井深 それが非常にはっきり入っていて - その暗唱は音だけの暗唱です - ユダヤ人はそれから、塾へ行き、今度は字を1つずつやって、いわば「子曰ク」をやるわけです。

塾へ行ってから日本と違うところは、討論というか議論を人為的にさせられる。赤と黒とでどっちが正しいとやって、また入れかえてそれをする。アメリカに住んでいても、それは全部ヘブライ語でやるんです。

だから、全然異質のアメリカに住んでいるユダヤ人が、ヘブライ語をそのために使われるんですけれども、そのためにまる暗記せざるを得ないわけです。そうすると、ユダヤのティピカルな家庭で育った人は、例えば大学教授だったとすると、全く違う言語の国へ行っても1年間いれば、大学の自分の講義をその国の言葉で十分やれるようになる力を全部が持っているといわれている。もう暗記をすることがビルト・インされているんですよ。

草柳 今、ちょっと追跡してみようかと思ってるんですが…アジア・太平洋経済圏というのを日本がしきりに言っているわけです。何しろアメリカ、カナダと結んで、メキシコを抱き込んで、北米経済圏のワンプロックができて、ご承知のように、ヨーロッパは92年からヨーロッパ統合、ECですね。じゃ、アジアはどうするんだということで、太平洋経済圏とか、あるいは環太平洋経済圏、アジア経済圏があるんですが…。

“ 新人類 ” から “ 在日日本人 ” へ

草柳 実際にアジアを歩いてみると、例えばバンコクは、そうはいかないよと言っているんですね。それに、シンガポールのお金を使って、ベトナム人の頭脳を使って、インドネシアの人口を使って、バンコクの中ぐらいのレベルのテクノロジーを使って、バンコクを中心に1つの経済圏をつくりますよ。日本に頼っていると、日本はアメリカの言うことしか聞かないから、つまり、アメリカの景気の波を日本が1回受けて、それを我々に転嫁してくるだけの話じゃないかと。

井深 都合のいい時だけ使ってね。

草柳 まさにそのとおりなんですよ。「ほー、それはおもしろいこと聞いた。なぜベトナム？」と聞いたら、「君、知らんのか」とタイで言われたんですが、世界でIQの1番高いのはイスラエルで、2番目がベトナム - この10年ぐらい、IQテストをやると2番目はベトナム人ですって。

今、井深さんのお話を伺って、おそらくベトナムにも、妊娠したお母さんが何かを唱えるときか、あるんでしょ。それを追跡したらおもしろいと思う。なぜベトナム人が頭がいいかというのをね。これは、今日は新しいテーマをいただきましたね。おもしろいと思いますね。

井深 だから言葉以前の教育というのは、非常に重要なことで、気配りとか、そういうものもそこから出てくるんですね。

草柳 そうでしょうね。

井深 だから、日本の製品がいいなんていうのは、気配りが非常に濃いですよね。

東南アジアの子供の学校の成績がアメリカで非常にいいというのは話題になりましたね、難民の子供で。

草柳 そうなんです。一時コリアだったんですよ。今、もうコリアはだめなんですよ。東南アジアの子がニューヨークですごく成績がいい。ベトナム難民の子がすごいでしょう。日本でも岡崎財団でとったら、ベトナム難民の子が断然トップなんですよ。日本語を習熟するのも早いし、医学部にも入れるんですよ。

それで、僕がもっと感心したのは、ある子が演劇をやりたいと言う。それで、日本語が上手にできるので演劇学校へ入れた。2年たったので、「君、演劇、どうだね、いい役者になれるか」と言ったら、「そうですね、大根役者でしょうね」と。「君、それなら大丈夫だよ」と言って・・・（笑い）

だけど、今、アジアの子ってほんとうにいいですね。ま、いい子ばかり来るんだけど。

井深 ベトナムというのはちょっと頭になかったな。

草柳 私、アジアを歩いていて、それが1番大きな収穫でした。それはやっぱり母親の教育とか、家庭がしっかりしているんだと思う。

だから、社会の原単位の家庭というのは大切ですね。

「今、日本人でも、日本語がうまくできない、日本の歴史を知らない、日本の礼儀作法を知らない、という子がいるけど、そういう子を何と言うんだ?」「新人類と言うのか」と言ったら、「草柳さん、古い。新人類なんて10年前の言葉ですよ」「じゃ、何ていうの」と言ったら、「在日日本人」と言うんです。これはまいりましたね(笑い)。

井深 在日日本人はよかったな。

草柳 ところで、ボイス・オブ・アメリカというのはいいですね。あれは大変な才能ですね。湾岸戦争のニュースもニューヨークの株式相場も、テキサスで起こった火事も全部2600字のワードの中に入れちゃうんですね、ボイスワードの中。この技術はすごいですね。

だから、うんと初級の英語しか分からない者でも全部聞ける。

井深 そうすると、字が多いから急いでしゃべるなんていうことじゃないわけですね。

草柳 ものすごいスロースピードなんです。

井深 じゃあ、おもしろいものをお見せしましょう。私の所で作った、これはリピーターといって、ソフトのカードを入れると何回でも聴ける機器です。英・仏・独・伊…。

それで、これにはおもしろい話がありまして、うちは記憶に関しちゃう世界的な記録を持っている人がいるんですよ。円周率を4万桁までクリアしてギネスブックに載っている人がいる。

それで3・1416何とかというのを憶えるのに、数字の1つずつを電話とかテレビとか何とかに並べかえて、キーワードにして絵巻物を頭に描くようにして憶える。

そこで、この機械ができたので、3万桁からはこれで音に置きかえて…もちろん絵巻物でキーワードは覚えるんだけど音も使って、寝る時にスイッチを入れて、ずっとしゃべってもらって、30分たったら勝手にスイッチ・オフできるようにして。

4万桁を一気にクリアするには朝10時半から明け方の3時半までかかったそうですけど…。その時に、頭の中で絵巻物をずっと繰り返してやるから、10デジタルを言うのに15秒から20秒ぐらいかかっていたんですよ、思い出さなきゃなりませんからね。ところが、3万桁まできて、リピーターを併用したところから、出てくるのが10秒から15秒に短縮された。これは音で覚えちゃっているんですよ、インデックス(索引)を…。

大人といえどもやっぱり、まる暗記というのは、口調ですと出てくるんですよ。

草柳 なるほどね、ずっと繰り返しを聞いていればいいわけだ。

井深 それで、覚えちゃったら、今度は自分で言ってみて…。

草柳 いやあ、おもしろい。よくイタリアへ行くので、これで完全にイタリア語をマスターしてやろう。

やっぱり、文化・伝統のきちんとした国というのは、行くと勉強になりますね。新しいニュースや何とかは、CNNを見て、そして世界中どこに行ったら、ヘラルド・トリビューンが出ていますしね、キャッチアップできるんですよ。でも、それ以前のことが分からないと、ほんとの友達ができませんね。

井深 どうも文化ということになると、日本は情けないですね。

今日はお忙しいところ、ほんとうにありがとうございました。

おわり